

・名古屋市街の完成には大別しておよそ三つの段階があった。即ち第一は慶長の草創時代、第二は享保の宗春時代、第三が明治の共進会時代である。第一番 清須越と名古屋城築城、その城下町について考察してみよう。

○清須越

徳川家康が名古屋城の築造を決すると同時に、清洲より名古屋への遷府令が発せられた。あらかじめ行なわれた町割に従って、いさ多くの寺院から大小町家・橋梁の一部までが逐次移転された。一方、新築の石垣工事は着々と進められ、巨石資材の運搬と西国諸大名のつれてきた職方人夫の作業と合して名古屋台北辺の混雑は未曾有のものであった。かくて名古屋城の落城と相まって6万石の城下町はここに出現したのである。当時の町数は町名とそのまま移したもので67、寺院は聖徳寺、政秀寺、法華寺、大光院等約110、など城下の大部分が移転された。

清須越はいつ始まったか、明らかでないが次のことから推察できる。
尾州旧話略：「慶長15年(1610)9月頃から清須の御家人追々宅を名古屋に移す。諸寺院・神祠も移る。」

広井八幡社家の記録：「慶長17年名古屋検地町割」

編年録全文や金府紀載：「慶長18年名古屋越の諸士や町民の住居が定まる。去年までは侍・町人共が清須・名古屋かけもちで近郊の知行所にかり住していたものがあつたが18年には全部定住した。」(これより、慶長15頃に移転準備、一部移転が始まり、17年に計画的な町割が完成、18年に移転が完了したと考えられる。

○城下町

近世の城下町に採用された都市計画の中心的課題は、その威容による民衆の心理的抑圧もさることながら、防衛的施設をいかにするかにある。岡郭の規模、侍屋敷の配置、堀川による水陸連絡、寺院の配置、特殊な道路と街路の形態等がそれである。今一つは商工業的要素を集中し、都市の繁栄を図るにである。城下町名古屋の町は広い台地と低地とを巧みに利用し、東西52町(5.8km)、南北54町(6.1km)の三角形にのび、面積は清須の5.6倍もある雄大な規模である。

城郭や附近にあった若宮八幡・才松寺・善光寺等もせに移転して立をけずり谷をうめて整地し、熱田から名古屋まで船入り水量を測候量し、堀川を切り開いて都市と海との連絡をとり、全体が碁盤割を中心に街路が東西南北と整然とのび、形態上では近代性が見られ、採来都市が成長する基盤がうちだされている。

城郭は侍屋敷でかみ、侍屋敷は大体5つ位に固まり町屋が混在しない。侍の町だけに侍屋敷と町屋との面積の比は7:3といわれている。町屋は中央部の碁盤割に集まり、本町・茶屋通りから出る5.6本の主要街道筋に線状にのびている。

この外に寺の門前町が現われている。寺の配置は防備の弱い街道筋に集団的に配置し、本町筋を固める南寺町、今の太閤と飯田街道筋を押える東寺町と大曾根方面の外郭として建中寺・相応寺・長久寺の大寺院を配置している。

これら寺や町の外側に鉄砲隊など足輕屋敷の集団で囲んでいる。